

同筆の奈良絵本—嫁入り道具としての物語絵



『しづか』(貴重書99-32-1~2) 上册第2図

諸本と異なり、別れに涙する静いそのせんじと磯禪師や浄土寺の尼たちを描く



『からいと』(貴重書99-14-1~2) 上册第4図

諸本と異なり、梶原景時に捕らえられた唐糸からいとを中心に描く

このところ研究が著しく進展している分野に、奈良絵本・絵巻の研究があります。奈良絵本とは、室町後期から江戸中期に盛んに制作された絵入りの彩色写本の総称で、同時代の絵巻を含む場合もあります。内容は、『浦島太郎』や『一寸法師』といったお伽草子作品から、平安時代の物語や鎌倉時代の軍記物、歌集や随筆、芸能作品にいたるまで多岐にわたります。明治時代以降に使用されてきた呼称ですが、奈良時代のもので奈良で制作されたわけでもなく、その由来は判然としません。本文の筆者や挿絵の絵師についても署名などがなかったため、いつ誰がどのようにして制作したのか、これまで容易にはわからない状況でした。しかしながら近年、同一の筆跡や描き方のものが数多く見られることから、徐々に制作の実態が解明されてきました。大名家や豪商の発注によるものも多く、京都の工房で制作されたと考えられ、仮名草子の作者として知られる浅井了意や往来物の著者である居初いそめつななど、具体的な作り手も明らかとなっていきます(石川透『奈良絵本・絵巻の展開』三弥井書店、二〇〇九年ほか参照)。

当館でもさまざまな奈良絵本や絵巻を所蔵しており、当館ホームページの「新・奈良絵本データベース」からは、所蔵品の一部をオールカラーでくずし字の翻刻とともにご覧いただけます。なかでも今回紹介する『からいと』と『しづか』の奈良絵本は、同工房での制作と思われる点で注目されます。いずれも紺地表紙と朱題しゅだいに金泥で草木を描き、料紙は金泥草木の下絵入りの鳥の子紙を用い、絵にも金銀を多用した豪華本で、江戸前期の書写と推察されます。縦約三〇cm、横約二二cmとほぼ同じ書型で、本文の筆跡や挿絵の色遣いをはじめ、樹木や人物の描き方、衣の模様といったるまで極似し、同工房で制作された同筆の奈良絵本と推定されるのです。

そもそも両作品は、物語内容においてもいくつかの共通点を見いだせます。『からいと』は版本『唐糸草紙』として広く流布したお伽草子で、源頼朝の命を狙い、捕らわれた唐糸を、娘の万寿が鶴岡八幡宮で舞を舞い、八幡の靈験と舞徳によって救い出すという芸能成功の物語です。歌舞芸能を軸とした母娘二代の物語には、『平家物語』の刀自とじと祇王ぎおう、『義経記』の常磐とこわかとその母や磯禪師と静しづかなど、女性芸能者の物語における母子関係の反映が見てとれます。とくに、頼朝の前での芸の披露を初めは拒むものの、乳母に促されて舞を舞い、母の釈放と恩賞を得る万寿の姿は、母の説得によって最終的に頼朝の前に舞った静を彷彿とさせます。

『しづか』は幸若舞曲をもとにしたもので、奈良絵本や絵巻としても普及し、室町末頃の古写本も伝存します。当館蔵の同筆の二本はそれほど古くはないものの、先行する伝本の挿絵を踏襲しつつも、女性芸能者や尼僧を前面に描き出すなど、女性の享受を意図した改変が認められ、物語の祝言性や豪華な装訂からも、嫁入り道具として特定の女性に向けて仕立てられたと考えられるのです。

残念ながら、当館蔵本と同筆の奈良絵本は、現在のところ他に見いだせていないのですが、同筆の別作品が制作されていた可能性は十分に考えられます。当館ホームページのカラー画像を是非ご覧いただき、同種の奈良絵本をお見かけの際には、ご一報いただければ幸いです。

(恋田知子)